

臨床心理学における一人称視点からの質的研究法について

研究生 王 奕 涵 博士課程 2 年 曾 谷 美 華 (京都大学大学院)
博士課程 2 年 薛 海 升 修士課程 1 年 村 上 めぐみ
教授 能 智 正 博

はじめに

「自己物語」を研究したいという発想は、研究をする者の誰もがふと思うような素朴な願望ではないだろうか。臨床心理学やカウンセリング心理学の分野では、1980年代から精神分析、分析心理学、ゲシュタルト療法、ナラティブ・セラピーなどで「物語」が取り扱われるようになった(森・福島, 2007)。また、対人恐怖の治療過程においては、森田療法の視点から患者の語る自己物語の重要性への言及がある(塩路ら, 2004)。

質的研究は、ナラティブ・ターン(物語的転回)といわれる認識論の変革を土台としている。客観主義の基盤になってきた素朴実在論への懐疑や観察者と観察対象との相互行為や、そこで共同的に生成される意味やナラティブ(語り・物語)を重視する特徴がある(やまだ, 2006)。

近年では臨床心理学研究の分野において、質的方法が普及したことに伴い、研究者および実践者の「内省」の重要性が強調されるようになってきた。内省とは reflexivity であり、主に自分で自分自身を振り返ることを意味する。Varela (1999) は、現代の認知主義を批判し、認知科学が計算メタファの支配を超えて、より視野を広げるべき時ではないかと主張した。実際に生きている人間の経験という現象や、意識のプロセスに関する情報を収集するための経験的道具として、内省や内観を用いることの重要性を指摘したのである。

また、質的研究における内省の重要性が認識されるようになるにつれ、研究者自身の経験と語りをデータとして、自己を研究対象とする一人称視点からの質的研究法も注目され始めている。

文法的には、話し手を一人称、聞き手を二人称と呼ぶ。しかし本稿では一人称視点(first person perspective)の「一人称」という語を、話し手、または語り手という会話上の役割に限定しない。研究者は臨床心理学の実践者及び研究者として研究を実施すると同時に、当事者と

して、その二重性が重なった視点を重視とし、主体的に研究を行うことを当事者性の一つの現す方として見なせる。

本稿では、一人称視点からの当事者研究を一つの新たな研究法を区切るような、カテゴリーとして仮定する。この条件はシンプルで、研究者が自分自身の経験をデータにし、最初から最後まで自分で全ての手続きを進めることのできる研究法のことを示す。

このような研究法はまだ発展途上ではあるが、ある程度成果も蓄積されるようになった。しかし関心をもつ初学者がいても、一人称視点の研究プロセスを系統的に整理した解説書等はまだまだ少なく、どこから学び始めればよいのかわかりにくいのが現状である。

そこで本稿では、まず自己を対象としたいくつかの質的方法の背景を紹介し、次いでこれまで使われてきたその方法論と手続きを解説する。さらにそれぞれの方法論を用いた代表的な研究をレビューし、その上で臨床心理学における意義または応用可能性について論じる。

一人称視点からの質的研究

臨床心理学研究も含め、従来の心理学研究では、「研究」を特定の学問体系内で共有される方法論に基づき、研究者と研究協力者あるいは参加者などの名称で、立場を二分法するのが一般的であった。つまり、経験自体は基本的に研究者とは無関係とされ、研究者は客観的なポジションに立つ。そこでは当事者の内省は無視されることになると考えが切り離しえられる。結果的に、当事者の視点とは無関係の問題として研究を進めることとなり、研究を通して得た理論は、ある程度権力に揺さぶられたものになるだろう。

このような「当事者≠研究者」の立場の置き方に関し、研究者も当事者である場合、今尾(2007)は、研究者である自身から「当事者」である自身を、研究というコンテキストから「当事者」の視点を排除しようとする

立場であることを示唆していた。これは、「当事者」に関するあらゆる問題を、自分とは無関係の問題として切り離してしまう立場である。

臨床心理学研究の分野において、研究者自身が当事者として一人称視点から自らの経験を研究することの意義としては、大まかに以下の3つを挙げることができる。

一つ目は、臨床心理学の実践者や研究者の中には、過去に心理的な問題と関わった当事者、「傷を負った癒し手 (wounded healer)」が少なくないということである。学部学生を対象とした質問紙調査では、カウンセラー志望者には、いじめられ体験のある学生が非志望者よりも有意に多いことが示された。これは松本 (2002) によると、当事者である研究者は、単に客観的な視座ではなく、当事者と対話的な視座で考察を加えることができ、さらに、当事者という特徴は、まさに問題に対する近きゆえに、切実である。これは、臨床心理学研究分野でも同じく、過去に心理的傷つきを持つ当事者性の持つ研究者がその自己物語を素材にして研究をするのは、最も当事者性の強いプロセスとして、新たな知見が得られると期待できるだろう。

二つ目は、権力から影響を受けにくい研究ができるということである。ここで言う「権力」は、政治的・国家的なハードなものではなく、もっと身近でソフトな「人々を何かに従わせる力」という意味である (野口, 2002)。従来の研究プロセスは、研究者と当事者が非対称的な関係性の下で進行するのである。それによって、研究者の視点が過度に正当化されるような力が働くこともありうるだろう。それに対し一人称視点からの研究の場合、研究者は自己物語に向き合って内省的に研究するため権力の影響を受ける可能性が低いと思われる。

三つ目は研究知見の実践への還元が容易になるということである。河合 (2001) によれば、心理臨床における神話、伝説、昔話のような「物語」の役割についてふれ、心理療法の過程そのものが物語であると述べている。「物語」は心理臨床において重要な役割を果たしていると思われる。精神分析の領域では、現在とつながる形での過去の想起が重要であり (森岡, 1999)、転移・逆転移が治療プロセスにおいて重要である。また、心理臨床学研究の中核である事例研究において、心理療法の場におけるセラピスト自身の体験に焦点を当てその主観性を省察するという方法によるものが近年散見される (鈴木, 2021)。このような研究について、鈴木 (2021) は、公に提示されることの少ないセラピストの個人体験の断片を慎重な選択によって抽出し、それらを素材として事後的に振り返る心理臨床学研究を行うことは、「セラピ

ストとしての私」の自覚を促す主体的な心理臨床家の営みとなることを主張した。セラピストである研究者が自ら、転移・逆転移を含めた治療経験を一種の自己物語として公にした場合には、メンタルヘルスのサービス向上や内省による実践への還元が期待できるだろう。

当事者研究

近年精神障害や発達障害をもつ人の中で広がっている当事者研究も、本稿における一人称視点からの質的研究に当てはまる。当事者研究は、「研究」を再定義するところから始まった。従来の研究は、知の生産を目的とする活動であったのに対して、当事者研究という活動が目指しているのは、自助である (熱田, 2013)。当事者研究の発祥地とされる浦河べてるの家は、精神病などを経験した人々が生活し、地域社会で共に働く共同体である (浦河べてるの家, 2005)。べてるの家ではセルフヘルプが非常に重視されており、そこでよく言われている「三度のメシよりミーティング」という言葉に表れているように、当事者間の対話が「研究」の方法の中心に位置づけられている。これは、長期の訓練や知識に裏打ちされた専門性をその実践者に求める従来の学問研究とは対照的である。その敷居の低さと、セルフヘルプ重視の方針から、当事者研究は大きな広がりを見せている。

当事者という概念は、1980年代以降の障害者の自立生活運動の中で生まれ、日常生活において必要な介助を受ける際に、障害を持つ本人の意思が抑圧されているという問題提起に対し、本人が周囲の援助者や家族に代弁できない意思があることを表すために、使われるようになった (熱田, 2013)。当事者という言葉はまだ定着した英訳がなく、当事者研究も日本独自の歴史と背景を持つ和製アプローチであるが、綾屋 (2023) が当事者研究の誕生の背景には、米国のアルコール依存症自助グループや薬物依存自助グループの発展から影響があると論じる。

当事者研究は、自己の問題に対処するための手段として誰にでもできるという体裁をとっており、そのやり方に決まった手順はなく、研究テーマの設定方法も基本的に自由である (べてるのしあわせ研究所, 2009)。とはいえ、べてるの家における当事者研究の進め方を、①〈問題〉と人との切り離し作業、②自己病名をつける、③苦労のパターン・プロセス・構造の解明、④自分の助け方や守り方の具体的な方法を考え、場面をつくって練習する、⑤結果の検証、の5つの段階にまとめていることができる (浦河べてるの家, 2005)。以下では、渡辺と摂食障害研究班による摂食障害の研究を紹介する (浦河べ

てるの家、2005)。

一般的な研究は摂食障害をいかに治すかを焦点に当てがちだが、摂食障害の当事者にとってそのような研究は、罪悪感に苛まれるものとなりうる。そのため、べてるの家の当事者研究では、「いかに治すか」という発想を逆転させて、「どうしたら(摂食障害に)なれるか」という視点から研究を始めた。その結果、摂食障害の当事者は、自分自身のことばを通じて「食べ吐き」を語り直し、再評価することができた。

「研究」は基本的にグループでの議論と検討を通して進んでいく。それぞれの研究員は自分自身の経験を語り、互いの共通点と相違点を見出した。その結果は「料理をマスターする調理人」というメタファーとして表現された。具体的に述べると、まず摂食障害の体験の多様性を表すために、「苦勞のフルコース」という表現が用いられた。作られるべきメインディッシュは摂食障害だが、幻覚症状、引きこもり、自傷行為なども挙げられた。続いて、摂食障害という料理を完成させるため、よい食材が必要とされ、その食材を調達するための土壌づくりが大事である。例えば、親からの評価にこだわる、高い目標を掲げる、気持ちを隠す、社会の風潮や流行に敏感になるといった土壌づくりに日々励むことが摂食障害という料理を作るためには必要である。

次に、摂食障害に関する「職人技を大公開」として、「まず腹を空かせておく」、「人間関係の見極め」、「シナリオの作成と実行」、「演技力」、「痩せてきたら人に会う」等というふう整理し、他者をコントロールするためのスキルが研究班会議で公開される。これを通して、摂食障害そのものの問題を越え、そのベースにある生きづらさをしのぐ手立てとして、食べ吐きを利用しているのだと研究員たちは気づく。

最後に、臨床心理学における当事者研究の意義だが、当事者研究の要素は臨床心理学的援助におけるアセスメントと介入の循環と酷似している。両方とも、問題が発生・維持するパターンを特定したうえ、解決に向けて試行錯誤的に介入を行う。しかし、臨床心理学と異なって、それを行う主体は当事者同士である。臨床心理学でも、クライアントとセラピストにおけるフラットな関係性を維持することが重視されてきたが、専門家-非専門家という対立関係が成り立つ以上、対等な力関係を完全に保つのは難しいだろう。それに対して、当事者研究では、当事者の主体性を発揮させるために、援助にかかわる専門家が基本的に見守り態勢でかわり、「認める・信じる・任せる」ことを原則とする「非援助の援助」という新たな援助の在り方が提案された(浦河べてるの家、2002)。

その原則は、具体的に、自分が無力であると「認める」こと、人と場を「信じる」こと、流れに「任せる」とことと自分を委ねてみることである。これは、臨床心理学の実践と研究とともに大いに刺激を与えるはずである。

自己エスノグラフィー

Ellis (2004) によれば「自己エスノグラフィー」とは、研究者自身の経験のエスノグラフィという質的研究のひとつの形態であるという。それは、自叙伝的な記述を通し、個人と文化を結びつける重層的な意識のあり様を開示していくものである(沖潮、2013)。

自己エスノグラフィーの起源は少なくとも30年前にさかのぼる。背景には、従来のエスノグラフィーの在り方への批判があった(Adams et al., 2022/2015)。1970年代から1980年代にかけて、人類学をはじめとする多様な学問領域において、研究者が自身を研究の経験と切り離すことができるとする従来の考え方に対して批判がなされた。以降エスノグラファーは、自分自身が研究対象の一部と理解すること、そしてフィールドワークの経験によって自身がいかに形作られるかを示すことが望ましいとされた(Adams et al., 2022/2015)。同じ時期、フィールドワークにおける研究する側とされる側の間の権力構造の存在が指摘され、学問的な言説によって沈黙させられる存在への関心が高まった(Adams et al., 2022/2015)。このような背景の下で、自己エスノグラフィーは、研究者自身のアイデンティティや文化との結びつきを認識し、そのアイデンティティや社会的立場が研究の仕方や経験の評価にいかに影響を与えるかを認識するための手法として生まれた(Adams et al., 2022/2015)。

ハヤノ(Hayano, 1979)は自己エスノグラフィーという用語を人類学者が「自分自身を文化的レベルで研究すること」と定義した。その後80年代から90年代にかけて、Ellis & Bochner, (2006/2000)が挙げているだけでも、60を超える自己エスノグラフィーによる研究が行われている(沖潮、2013)。2010年代以降には、人類学だけでなく、教育学、看護学、心理学、地理学など多くの学問領域において、重要な手法の一つとして認識され始めている(Adams et al., 2022/2015)。

自己エスノグラフィーのプロセスにおいては、研究者が自身の経験やそのときの感情などを振り返り、想起しながらそれをストーリーとして記述していくことが求められる(沖潮、2013)。このような自己の経験の記述としては、他にも自伝や回顧録、日記やエッセイなどでも挙げられるが、自己エスノグラフィーは単に自己につい

での物語として人生を伝えるのにとどまるものではない。それは理論等が組み込まれた研究という形態をとり、最終的には批判的・分析的・解釈的な検討を経て、自己や他者に関わる文化的理解が表現されるという点に特色がある (Chang, 2008; Ellis, 2004; Muncey, 2010)。

自己エスノグラフィーを用いた代表的な研究としては、著者と父親との関係におけるセクシュアリティに関する問題を記述した Adams (2006) や、アルツハイマー病と診断された父親とのコミュニケーションについて記述した Fox (2015) などが挙げられる。日本においては、ソーシャルワーカーがセルフヘルプグループから得られるものについて自身の体験をもとに考察した松田 (2010) の研究、東北地方で暮らすことになった関西出身者としての自己と他者認識の形成と変遷について記述した川口 (2019) の研究などがある。

臨床心理学の研究者である沖潮 (2016) は、自己エスノグラフィーの手法を活用して経験を記述し、障害者のきょうだいとして生きることの本質や心理的特徴を探る試みを行なっている。

自己エスノグラフィーでは、主要なデータの提供源が研究者自身となっており、執筆の段階においても書かれる人と書く人が同一人物であるところに特徴がある (Coia & Taylor, 2009)。個々の文化や生活世界の中で立ち上がる経験から出発し、意味の世界を検討・表現していく自己エスノグラフィーは、ボトムアップな知を作る方法としてすぐれていると思われる (能智, 2011a; 沖潮, 2013)。また、個人により焦点化した文学的な記述は読み手にとっても読みやすいものであり、研究者だけでなく読み手側にも自己省察を引き起こすことができる。さらに自己エスノグラフィーの執筆は、研究者にとって個人的な失望やトラウマ、喪失に向き合う対処方略となり、幸せに豊かに生きる手助けとなることもある (Chang, 2008; Ellis, 2008)。

一方、自己エスノグラフィーという手法には限界もある。例えば、データそのものが記憶に頼りすぎているために信頼性問題があること (Chang, 2008; Ellis, 2008) や、好きなことをただエッセイ風に書いていただけで解釈や分析が十分に含まれていないこと (Smith & Sparks, 2008) について批判がなされてきた。実際沖潮 (2013) によれば、自己エスノグラフィーを遂行する研究者は、自身の経験を対象化し分析的に記述していくことの難しさに直面することが多いという。また、自己探究を進めていく過程において、自身への恐れや疑い、精神的苦痛といった感情的な困難さを感じる可能性がある。さらに、研究成果を発表することで自身の経験が公

にさらされることとなり、匿名性が担保されないことも、自己エスノグラフィーにおける難しさの一つである。

以上の限界を踏まえて、沖潮 (2013) は自己エスノグラフィーの手法を発展させ、対話的にデータ収集と分析の実践を行った。この「対話的な自己エスノグラフィー」では、従来の手続きをベースにしながら、対話者を設定し、語られたライフストーリーに対して研究者と対話者が共同的に分析・解釈を行う。一人語りにも「不在の他者」——つまりこれまでの他者とのやりとりや関係を通して蓄積された内なる他者——が関与しているという (能智, 2011a)、対話においてはそれが具現化されており、伝統的な自己エスノグラフィーによる一人語りよりも自身を外から見る明確な契機が与えられるだろう。従来の自己エスノグラフィーに対しては、上述のように、データの信頼性、物語の信頼性などの問題が指摘されている、それと相対的に、対話的な自己エスノグラフィーはそうした批判に応えた上で、他者の介入により新たな視点が生まれ、研究の拡がりが増すといった有用性があると考えられた。

対話的エスノグラフィーと似た方法として、Coia & Taylor (2009) は共同的な自己エスノグラフィー (co/autoethnography) を提唱している。これは、データの収集・分析の両方の段階で2人の研究者が対話的な研究実践を行う方法である。その過程では2人の研究者それぞれが自身の経験を記述し、共有し、議論するという作業が繰り返され、最終的にひとつの研究論文が仕上がっている。この研究の場合、両者とも教師教育の専門家であり、自らの教授法を明らかにしながら教師としてのアイデンティティに関する洞察を得るという一つの目的のもとでうまく機能したものである (沖潮, 2013)。

語り合い法

本節では、体験に伴う質感に迫る研究法とされている「語り合い法」を紹介する。

さまざまな「質」を捉える研究法がある中で、語り合い法は人間の生きる「実感」に迫る研究法と言える。この方法は 大倉 (2002, 2008, 2011) が「アイデンティティとはそもそも何なのか」を解明するために、人間的了解を目指す心理学の新たな方法論として提唱したものである。そこで調査者は協力者と一対一で語り合い、また協力者の言葉に限らずその場で調査者が感じたもの (雰囲気、感覚など) を考察に取り入れることによって、協力者の体験世界を明らかにしていくアプローチである。体験は身体を通して了解されるという考えから、協力者の

言葉として十分に表現されないような前言語的感覚を、調査者が間身体的・間主観的に捉えて分析に活用する点は、従来のインタビュー法と大きく異なる点である。

語り合い法が用いられているこれまでの研究を概観していく。大倉（2002）は自身も含めた青年たちのアイデンティティ拡散に関する実感を描き出し、世界から投げ出されたような体験は「自」を裏支えていた「他」なるものを喪失したことから生じるという理論を構築した。それによって、従来のアイデンティティ研究ではとりこぼされていたアイデンティティの重要な側面が明らかにされた。大倉のアイデンティティ研究のように、量的・質的研究によって知見が蓄積されている分野においてこそ、当事者の「実感」に迫ることで新たな知見が得られることがある。例えば町田（2022）は、周囲の人々のトランスジェンダーに対する理解が知的な次元に留まっていることを問題視した。そこで、当事者同士の語り合いを通して、読者が追体験できるようなトランスジェンダーを生きる「実感」が描き出され、身体感覚的な次元の理解につながる性は雰囲気という理論が示唆された。

調査者の感覚も記述することが読者のより深い理解につながると考えられ、語り合い法は質的心理学の研究法として用いられることが増えつつある（沖潮，2016；金・能智，2023）。上記の研究例はすべて当事者による研究であり、調査者自身の感覚をデータの一部に取り入れることは調査者でありながら研究対象者としてデータを提供することになる。その点で語り合い法は、当事者研究にとっても有用な方法であることは確かである。ただし、語り合い法が当事者研究にのみ限られているわけではないことは留意していただきたい。

次に、語り合い法の手続きにおける重要な構成要素を、データの収集と分析に分けて整理する。データ収集としての語り合いの実施においては、「調査者（私）と協力者（あなた）が話し合いながら、あなたがどのような体験をしているのかを一緒に探っていく」という三角形の構図を維持することが重要だとされている（大倉，2008）。語り合いの本質は三角形の構図にあると言われるほど、調査者が協力者と同じようにその人の心的風景を味わう姿勢を保つことが求められるのである。

分析は「メタ観察」と呼ばれる作業にその特徴がある。具体的な手順は町田（2022）によって、次の3つの作業にまとめられている：①調査者が協力者から何を感じとっていたのかを洗い出す作業、②そうした間身体的・間主観的に感じられたことが何に由来するのか考察する作業、③提示する語りが従来の学知に対してどのようなインパクトを与え得るのかを確認する作業である。語り

合い法の分析は「語り」ではなく、調査者が身体を通して感じた事柄に焦点が当てられるため、手順①は欠かせない作業である。手順②では、①で記述された内容が調査者の恣意的なものでなく、協力者の体験に伴う質感を捉えたものだという明晰性を確認する。そして手順③は、新たな概念装置や理論展開をしていく段階と言える。すべての手順における記述は、読者が追体験できるような形をとるよう心がける必要がある。

おわりに

本稿は、これまで臨床心理学の分野で注目されてきた、研究者の当事者性問題から問いを起し、一人称視点研究という研究法のカテゴリーを設定した上で、当てはまり得る既存の研究法を整理したものである。当事者という言葉はそもそも司法領域で使われる用語であり、その背後には、「当事者≠非当事者」という強烈な二分法的にとらえられた緊張関係が生じることもある（今尾，2007）と思われ、研究者の当事者性が切り離されていた。

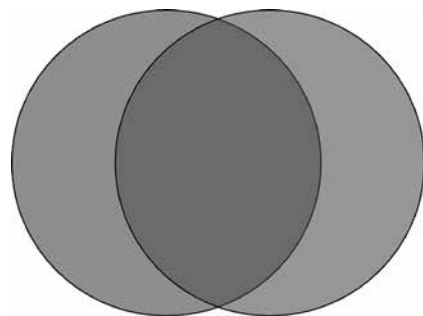


図1 研究者U当事者

本稿が一人称視点の当事者研究に対するイメージは、図1のように「研究者=当事者」ではなく、「研究者U当事者」という、研究者と当事者を重ねた二重性によって主体性としての当事者性が初めて成立する。実践研究とより密接な関わりをもっているのは質的研究の方法や手続きではなく、むしろ質的研究の視点（能智，2009）、手法そのものや方法論の厳密性に固執するのではなく、それぞれの手法の特性を理解した上で、臨床実践の知に資するために理解を深め、応用していくことが重要であろう（野田，2019）。臨床心理学の短い歴史の中、このような一人称視点と関わる知見、そして本稿が紹介した当事者研究、自己エスノグラフィー、語り合い法のような研究法における試みは少なくない。しかし、一人称視点を含めた人称間に存在する曖昧さ、その流動性や客観

性の欠如といった限界によって、これまで、グラウンデッドセオリーや会話分析などのような他の質的研究法ほどには系統的に発展することができていない。文字数の都合により、本稿は比較的良好に知られ始めた一人称視点からの質的研究に限って紹介した。

ここで紹介したもの以外にも、研究者の一人称視点から研究を進める方法の試みは存在しているだろう。本稿の目的は、あくまでこの分野に興味を持つ初学者に対して道しるべを提供することである。一人称視点からの質的研究が蓄積され、十分な厚みをもつようになった時には、この方法についてさらに系統的に整理する必要があるだろうが、それは今後の課題と言えるだろう。

また、本稿で提案したこの一人称視点からの質的研究という新たな区分については、その定義や構成概念、人称間の関係性などについて、発表される論文の検討とレビューを今後も重ね、議論を精緻化していく必要があると思われる。「当事者としての私が一人称視点に立ち、自己物語についての研究をしたい」という筆頭著者の素朴な思いは、この論文の土台となる部分であると同時に、私の研究の実践を推し進める原動力でもある。この面を常に心に留めながら、この研究方法のメタ的な整理と進展に向き合っていきたいと思う。

引用文献

- 熱田敬子 (2013). 当事者研究 藤田結子・北村文 (編) 現代エスノグラフィー——新しいフィールドワークの理論と実践—— (pp.74-79) 新曜社
- 綾屋紗月 (2023). 当事者研究の誕生. 東京大学出版会
- 浦河べてるの家 (2005). べてるの家の「当事者研究」. 医学書院
- 浦河べてるの家 (2002). べてるの家の「非」援助論: そのままでいいと思えるための25章. 医学書院
- べてる しあわせ研究所 (2009) レッツ! 当事者研究 1. 地域精神保健福祉機構・コンボ
- Chang, H. (2008). *Autoethnography as method*. CA: Left Coast Press.
- Ellis, C. (2004). *The ethnographic I: A methodological novel about autoethnography*. CA: AltaMira Press.
- Francisco, V & Jonthan, S (1999). First-person Methodologies: What, Why, How?, *Journal of Consciousness Studies*, 6, 2-3, 1999, pp. 1-14.
- Coia, L., & Taylor, M. (2009). *Co/autoethnography: Exploring our teaching selves collaboratively*. In D. L. Tidwell, M. L. Heston, & L. M. Fitzgerald (Eds.), *Research methods for the self-study of practice* (pp.3-16). Dordrecht: Springer Netherlands.
- Chang, H. (2008). *Autoethnography as method*. CA: Left Coast Press.
- Ellis, C. (2008). *Revision: Autoethnographic reflections on life and work*. CA: Left Coast Press.
- Smith, B., & Sparks, A. C. (2008). Narrative and its potential contribution to disability studies. *Disability and Society*, 23, 17-28.
- エリス, C.・ボクナー, A. P. (2006). 自己エスノグラフィー・個人的語り・再帰性—研究対象としての研究者 (デンジン, N. K.・リンカン, Y. S., 編・平山満義, 監訳). 質的研究ハンドブック 3 巻 (pp.129-164). 京都: 北大路書房. (Ellis, C., & Bochner, A. P. (2000). *Autoethnography, personal narrative, reflexivity: Research as subject*. In N. K. Denzin & Y. S. Lincoln. (Eds.), *Handbook of qualitative research* (2nd ed.) (pp.733-768). Thousand Oaks, CA: Sage.)
- Fox, R. (2015) “Re-Membering Daddy: Autoethnographic Reflections of My Father and Alzheimer’s Disease.” *Text and Performance Quarterly* 30, no.1 (2010): 3-20.
- Hayano, D. M. (1979). Auto-ethnography: Paradigms, problems, and prospects. *Human Organization*, 38, 113-120.
- 今尾真弓 (2007). 宮内洋・今尾真弓 (編) あなたは当事者ではない 〈当事者〉をめぐる質的心理学研究, 第6章当事者「である」こと/当事者「とみなされる」こと (pp80-91) 北大路書房
- 河合隼雄 (2001). 心理療法における「物語の意義」精神療法, 3-7.
- 金智慧・能智正博 (2023) 女性バイセクシュアルを生きる: 当事者同士の語り合いの質的検討から. 質的心理学研究, 22, 296-313.
- 川口幸大. (2019). 東北の関西人 自己/他者認識についてのオートエスノグラフィ. 文化人類学, 84(2), 153-171.
- 森美保子・福島脩美 (2007). 心理臨床におけるナラティブと自己に関する研究の動向 自己に関する研究の動向. 目白大学心理学研究, 3, 147-176.
- 森岡正芳 (1999). 精神分析と物語 (ナラティブ) 小森康永・野口裕二・野村直樹 (編著) ナラティブ・セラ

- ビーの世界, (pp75-92) 日本評論社.
- 松田博幸. (2010). ソーシャルワーカーはセルフヘルプ・グループから何をすることができるのか?—自己エスノグラフィーの試み—. 社会問題研究, 59, 31-42.
- 町田奈緒士 (2022). トランスジェンダーを生きる: 語り合いから描く体験の「質感」. ミネルヴァ書房
- Muncey, T. (2010). Creating autoethnographies. London: Sage.
- マーフィー, R. F. (2006). ボディ・サイレント (辻信一, 訳). 東京: 平凡社. (Murphy, R. F. (1987). The body silent: The different world of the disabled. New York: W W Norton & Co Inc.)
- 松本 (2002). 当事者による当事者研究の意義 教育方法の研究, 5, 93-98.
- 野田実希 (2019). 臨床心理学において質的研究はどのように語られてきたか—質的研究の認識論における臨床的可能性に向けて—. 京都大学大学院教育学研究科紀要, 65, 137-149.
- 野口裕二 (2002). 物語としてのケア 第7章三つの方法 4節権力問題 (pp137-142) 医学書院
- 能智正博 (2009). 質的研究法の視点と実践研究. 臨床心理学, 9, 22-26.
- 能智正博. (2011a). 質的研究法. 東京: 東京大学出版会.
- 大倉得史 (2002). 拡散diffusion: アイデンティティをめぐる, 僕達は今. ミネルヴァ書房
- 大倉得史 (2008). 語り合う質的心理学: 体験に寄り添う知を求めて. ナカニシヤ出版
- 大倉得史 (2011). 「語り合い」のアイデンティティ心理学. 京都大学学術出版会
- 沖潮 (原田) 満里子. (2013). 対話的な自己エスノグラフィ 語り合いを通じた新たな質的研究の試み. 質的心理学研究, 12(1), 157-175.
- 沖潮 (原田) 満里子 (2016). 対話的实践における〈あいだ〉の記述—語り合いと対話的な自己エスのグラフィを通して—. 質的心理学フォーラム, 8, 23-31.
- 沖潮 (原田) 満里子. (2016). 障害者のきょうだいが抱える揺らぎ: 自己エスノグラフィにおける物語の生成とその語り直し. 発達心理学研究, 27(2), 125-136.
- 塩路理恵子・中村敦・中山和彦 (2004). 対人恐怖の治療過程で見られる「自己の振り返り」について—外来森田療法を行った自己視線恐怖の一例の検討を通して— 日本森田療法学会雑誌, 15, 129-134.
- 鈴木志乃 (2021). 初任セラピストの見る夢とイメージ: 「セラピストの私」に関する事例研究. 大阪樟蔭女子大学臨床心理学専攻・附属カウンセリングセンター研究紀要, 5, 59-64.
- トニー・E・アダムスほか『オートエスノグラフィー 質的研究を再考し, 表現するための実践ガイド』新曜社, 2022年 (Tony E. Adams, Stacy Holman Jones, Carolyn Ellis (2015). Autoethnography: Understanding Qualitative Research, Oxford University Press)
- T. E. Adams. (2006) "Seeking Father: Relationally Reframing a Troubled Love Story." *Qualitative Inquiry* 12, no.4 (2006): 704-23
- やまだようこ (2006). 質的心理学とナラティブ研究の基礎概念—ナラティブターンと物語的自己—心理学評論, 49, 436-463.

(指導教員 能智正博教授)